

## <エッセイ> 日文研創立三〇周年を迎えて

著者	高馬 京子
雑誌名	日文研
巻	59
ページ	64-67
発行年	2017-05-21
特集号タイトル	創立三十周年記念特集号
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00006690">http://doi.org/10.15055/00006690</a>

## 日文研創立三〇周年を迎えて

高馬 京子

日文研創立三〇周年おめでとうございます。三〇周年を迎えられるにあたってこのように文章を寄稿させて頂ける機会を頂けて大変ありがたく思います。

私が日文研の存在を知ったのは、一九九〇年代半ば、当時の職場で見ていた一冊のフランスと提携していたある雑誌がきっかけでした。そこで掲載されていた日文研の記事を偶然見つけ、国際的な視点で日本文化を研究する研究所があるのだということを知り、どんなところだろうと調べ始めた記憶があります。当時ある海外ファッションブランドの広報をしていた私は反省的に「なぜ、人は海外（欧米）ファッションを追いかけるのか」、海外の商品が氾濫する日本において「日本文化はどう説明できるのか」という疑問を抱いていました。そんな時、日文研の存在を知り、国際的な視点で現代の文化とはなにかを研究してみたいと思うようになりました。その時の「種」が芽をだしたのか、まもなく実家近くの大阪大学大学院に社会人入学し、その間フランスに約四年間留学し、そして思いもよらなかった縁が重なりリトアニアの大学で八年間教鞭をとることになりと、まさに、国際的な視点で、微力ながらも日仏メディアにおけるファッションや女性の相互表象について研究に取り組むようになりました。

二〇〇六年からリトアニアという東欧の国に住みながらその地の大学で教育、研究活動を進めていました。当時のリトアニアの勤め先に定期的に日文研の出版物が送られてきており、そ

れらを眺めながら「外国の大学の大学に勤める身として、いつかあの日文研で外国人研究員として研究滞在できればいいな」と思うようになりました。そして、二〇一三年九月から一年間、山田奨治先生にカウンターパートをお引き受け頂き、日文研で外国人研究員として研究滞在させて頂くことが叶いました。

日文研に滞在中の一年間は充実した時間を過ごさせていただきました。日文研が主催される研究会やら講演会に参加し、聴講、時には発表させていただく機会を頂けたことも大変有難い経験でした。海外在住の頃、日本語で書かれた文献、資料の入手が現地では日本のようにはできないというのが悩みの種でもありましたが、タイトルや発行日もわからないある日本の大衆誌の記事まで探し出し、様々な資料を入手してくださった日文研図書館の皆さまのおかげで、多くの資料を集めることができ研究を進められたこと、歓送迎会やらランチミーティングなどで日文研の諸先生方、職員や院生の皆さんや、また他国の外国人研究員の先生方と様々な意見交換、交流をさせて頂いたこと、近くの桂川小学校に出前授業に行かせていただいたこと等、当時一二年近く日本を離れていた私にとって、研究面、交流面でも日文研で日本を再発見していく時間を過ごさせて頂いたと今思い出しても懐かしく、大変感謝しています。

滞在中、朝、日文研ハウスから研究室へ「通勤」し、また夜研究室から日文研ハウスへ帰宅するという毎日の中で触れた日文研の自然も美しく、ここは日本なのだなどと強く感じさせてくれるものでした。二二時近くの帰宅時に遭遇する鹿や猿といった動物たちもさながら、特に春の夜、帰宅時に中庭を抜け、光に照らされる入口付近の大きな枝垂れ桜を見るのが毎日の楽しみでもありました。

このように日文研の外国人研究員という時間を過ごさせていただいた後、現在は、明治大学

情報コミュニケーション学部でフランス地域文化論、同大学院では超域文化論を中心に教鞭をとりながら研究をすすめています。そんな中、私が冒頭で書いたような「なぜ海外のファッションを追うのか」という問を抱えていた二〇年以上前とは、私達をとりまくメディア環境も大幅に変わってきました。デジタルメディアが発達し、受信者と発信者の境目が曖昧になった今日、当時のような西洋のファッションブランド、西洋の大手ファッション雑誌だけが世界のファッションスタイルを決定するという時代ではなくなり、デジタルメディアを通して局所的なファッションが生じ、またそれらが言語文化を共有しない人々に局所的に様々に受容され、フランスナショナルな空間で形成、伝播、変容されていくようになりました。世界を代表する大手ファッション雑誌でも、「デジタルファッション」というコーナーが設けられ、そこでインスタグラムに掲載されたファッションを紹介しています。このように、特にファッションのようなポピュラー文化は、今までとは異なった方向からも形成、伝達されている傾向もみられます。日文研の外国人研究員時代にも調査させて頂いていたデジタルメディアによって海外の若者にも容易に受容されるようになった若者のストリートファッションとしての *Kawaii*: ファッションはその最たる例の一つといえるでしょう。 *Kawaii*: ファッションを調査する今日の私の問は、冒頭にあげた問「西洋の文化を取り入れながら形成される日本の（ポピュラー）文化はどのように説明できるのか」から「デジタルメディアを通して海外で様々に受容、変容、伝達される日本の（ポピュラー）文化はいかに説明できるのか」へと移行してきました。議論については場を改めたいと思いますが、文化の伝播の方向性が異なるにせよ、この二つの問の根底にあるもの変わらず同じなのかなという気もしています。

日文研で外国人研究員として一年間滞在させていただく中で、日本人として海外で生活、研

究、教育する中で感じた海外で語られる日本文化と私の知っている日本文化のずれに対する違和感について、既存の学問領域、研究対象を超えて考えさせていただく機会を頂きました。そのような機会を下さった日文研、諸先生方に感謝しつつ、今後の日文研の更なるご発展を心よりお祈りしております。

(明治大学情報コミュニケーション学部専任准教授)